

慶紀逸と『武玉川』(三)

八塚一青

二回に渡り書いて参りました『武玉川』についてその特徴を並べると左記となります。

- ・付句のみを掲載し元になった句を省略
- ・選ばれた句の質（内容）
- ・出版された時の本の体裁（今の文庫本サイズ）

しかし、「省略による一句立ての掲載」については、実は紀逸より二十四年ほど前に、大阪の俳諧師、松木淡々が出した『春秋関』という付句集の中で既に実践されています。「選ばれた句の質（内容）」についても、当時の江戸における江戸座俳諧の内容からすれば特に突出しているわけではありません。もちろん、紀逸の優れたセレクトによる武玉川らしさではありますが、その時代の雰囲気、流行、気分を現している、それ以上、それ以下のものではありません。

では、『武玉川』の一番の特徴は何か。誤解を恐れずに言えば、〈大ヒット〉したことです。その大きな要因となったのが、三つ目にあげた「今の文庫本サイズ」で出版されたことなのです。当時の「俳諧」関連の書籍は大判サイズが標準でした。それをどこでも持ち歩ける小型版で出版したことが画期的でした。実際、紀逸は同時代に書かれたものの中で「全体発明なる者」と評されています。アイディアマン、プロデューサーだったのです。それでは、『武玉川』の最大の価値は本の体裁なのでしょうか。

この『武玉川』の成功を真似て十五年後に刊行されたのが、川柳の原典と言われる『誹風柳多留』です。省略も内容も本のサイズも『武玉川』によく似たものですが、一つ大きな違いがあります。それは、『武玉川』が付句集であるのに対して、『柳多留』は「前句付け集」だったことです。前句付けの例です。

前句 切りたくもあり切りたくもなし

付句 盗人をとらへて見れば我が子なり

前句は七七の形で出されるいわば「お題」のようなもので、それ自体は詩ではありません。このお題に対して付けられた付句を集めたのが『柳多留』で、選者は柄井川柳です。『柳多留』が一番ヒットしたので選者の名前が「川柳」という文芸の名称にまでなりました。柄井川柳の選句眼も成功の要因でした。

句を付けるという行為、さらにそこに「採点」が加わった場合、人目を引こう目立とうと、「滑稽・笑い」の要素を持ってくるとするのは人の性です。そして、それは日本的なユニークなセンスですが、『武玉川』のように、詩である句に付ける場合は、期せずしておのずと余韻、余情のある付句が生まれます。一方、『柳多留』のように、お題を与えられていわばオチを付ける場合は、完結する句を付けなければなりません。つまり、同じ付句でも、『武玉川』と『柳多留』では、香りが異なるのです。

更に、今回、私は重大なことに気付きました。それは、川柳の原典が『柳多留』であるのであれば、滑稽俳句の原典は『武玉川』ではないかということです。もちろん、どちらも「俳諧」が原点なのは間違いありませんが、私にはこの『武玉川』が、滑稽俳句と川柳の分岐点だった気がしてならないのです。三回に及ぶ稿の最後に、滑稽俳句の母かもしれない『武玉川』から、余韻、余情を置いてゆきます。

菜売りが置いてかへる蝶々